

植民地朝鮮への「国文学」の移植と高木市之助

朴 光 賢

一 はじめに

京城帝国大学（以下、京城帝大）は、日本帝国が朝鮮に対する「科学的植民」を実験するために設けた朝鮮最初の近代の大学である。この新しい制度は、朝鮮に対する「保護政治」が始まって以来、植民地権力が推進してきた、朝鮮の「民度調査事業」の

成果を全体として「學術制度」の次元に転移させるとともに、アカデミズムを新たに本国から朝鮮に直接移植する、という二つの過程を統合して達成された。^{〔1〕}

植民地権力は、大学の設立を通じて、当時「植民地主義による知の拘束に対抗した学の独立精神」のために推進されていた「国立大学」設立運動を、改良するという道によって懐柔しようとした（朴光賢一九九三：三六一頁）。このようにして京城帝大は、

「国立大学」設立への民衆的熱望と、前代の朝鮮人學術の伝統を、アカデミズムから制度的に排除した。特に學術研究者という側面から見ると、日本語學術の実践場であった京城帝大は、自ずと朝鮮語學術の伝統をアカデミズム（としての京城帝大）の周辺に追い込むことになったのである。

近代日本の学問の發展様相をアカデミズムと民間学の対立の構図として把握した鹿野政直（一九八三：二六頁）を引用すれば、朝鮮の京城帝大の成立は、「アカデミズムによって国家が武装したという体系」が朝鮮に延長されたことを意味する。とりわけ、「国史学」日本史」や「国語国文学」日本語日本文学」に体现される「国家学」の朝鮮への「進出」は、本国（日本）アカデミズムの直接的な朝鮮への移植の性格、つまり京城帝大の性格を規定する重要な意味を持っていたと言える。

本稿では、その中の「国語国文学」の朝鮮「進出」の意味と、また、「国文学」の伝道師として講座を担当するために朝鮮に渡ってきた高木市之助の朝鮮の記憶と経験を通じて植民地朝鮮における「国文学」の性格を考察するものである。

二 京城帝国大学の文学科の構成

京城帝大における文学講座は、本科の開講された一九二六年には、「朝鮮語学・朝鮮文学」第一講座・第二講座とともに、「国語学・国文学」、「支那語学・支那文学」、「外国語学・外国文学」がそれぞれ一講座ずつの、合わせて五つの講座が開設された。

植民地大学にふさわしい「朝鮮そのものの研究」のための「特殊の学部」という配慮によって開設された「朝鮮語学・朝鮮文学」（以下、「朝鮮文学」）講座は、高橋亨と小倉進平が担当した。この二人は、朝鮮史学の第二講座を担当していた小田省吾とともに、植民地官僚出身の京城帝大教授を代表する人物である。なお、彼らは朝鮮の「民度調査事業」を「學術制度」の次元に転移させる過程において、誰よりも大きな役割を果たした。

本稿で取り上げる、この大学の「国語学・国文学」（以下、「国文学」）講座は、日本の「国文学者」が、初めて「外地」への「進出」という実験を行った学科でもある。これによって、朝鮮における教育科目として、「国語Ⅱ日本語」ではない、学問としての「国文学」という制度が成立したと言える。最初は、東京帝国大学（以下、東京帝大）国文学科出身の高木市之助が担当す

る一つの講座のみが開設され、比較的小さな形で始まったが、次第に「内地延長主義」の「国民意識と国民拡張」という理念を代表する「国史学」とともに、その規模を拡大していった。

赴任後まもなく、高木は教授会で「国語学」と「国文学」とはその性格が異なるため、別々に開設されるべきだと提案した。その提案が受け入れられた一九二八年に、第二講座の担当教員として時枝誠記ときぎ まことが、東京帝大国語国文学第一講座担当助教授であった橋本進吉の推薦によって赴任した。そして、一九二八年には、岡山の第六高等学校に在職中であった麻生磯次あしげ いそじが赴任し、「国文学」講座を担当するようになったが、それは実質的には第三講座と呼べるものであった。高木が退任する一九三九年には麻生が第一講座に、麻生の後任には荻原浅男が新しく赴任し、この三講座体制は終戦まで維持された。それは、教員の採用面において疎外された「朝鮮文学」講座とは全く異なる様相を呈あしていた。

その他、京城帝大法文学部には、朝鮮の地政学的特徴、つまり「東洋」という理念に対応する「支那語・支那文学」（以下、「支那文学」）講座や、「東洋」という文化的同質性を逆規定するために、その対立項である「外国語学・外国文学」（以下、「外国文学」）講座が開設された。

開校当時、「支那文学」講座は児島献吉郎が担当した。一九三〇年に児島が退任した後は、一九三二年に赴任した辛島驥たけし「美学・美学史」担当の田中豊蔵が分担したが、やがて辛島が

一人で担当した。「外国文学」講座は、英文学者の佐藤清が担当した講座が唯一のものである。「学科編成」規定の「外国語履修規程」第一条によって開設された、英語、ギリシア語、フランス語、ドイツ語などがあり、この講座には大抵ネイティブ・スピーカーを採用することができた。しかし、これらは、東京帝大の場合と異なり、専攻(学科Ⅱ学問)として認められておらず、教養履修講座に過ぎなかった。実際に「外国文学」の代表格と言える「英吉利語学・英吉利文学」のみが、唯一専攻として認められたのである。それにもかかわらず、「外国文学」を講座名として定めたのは、先に指摘したように、「東洋」という文化的同質性によって、朝鮮を規定することを企図したことを意味する。それは、「外国文学」第二講座が設けられ、これを担当した寺井邦男(英語学・英語小説担当)が赴任した後も続く。寺井は留學後、一九二七年に人事發令を受けて赴任し、一九三七年に退任した。やはり英文学専攻の中島文雄が後任を引き受けることになり、「外国文学」講座と言っても、実質的には英文学専攻のみが開設、維持されたことがわかる。

三 近代日本「国文学」の移植実験と高木市之助

三一 高木市之助の記憶

国民の歴史の代表とされてきた「国文学史」の外地へのはじめの移植実験は、言うまでもなく、「国文学」講座を通して、「内地延長主義」に基づき、朝鮮で国民理念の拡張を実践するため

のものであった。そのため、高木の「国文学」講座は、「内地」の「国民一般」と植民地民族との差異が存在するにもかかわらず、その差異を消滅させることができる、あるいは、そうしたければならない、という当為の政治性の上に設立されたものであったと言える。言語によって表象される文学は、やはり言語によって差異が示される。「国文学」も「国語」によって表象され、外部との差異が浮き彫りになる。もし朝鮮における日本文学を、「国文学」として位置付けることが可能になったならば、そこには差異を超越する何らかの理念が作用したとしか思えない。

一九二二年の「朝鮮教育令」に明示されたように、京城帝大は、「国語を使用する者」へと誘導する「国民」の制度である。朝鮮人が「国民」であれば、朝鮮文学も民族文学の地位から抜け出し、新しく規定された「国文学」に従属するはずであるが、現実はそのようではなかった。京城帝大法学部の講座構成からわかるように、「国文学」は「国家学」として権威あるものであったかもしれないが、朝鮮文学はこれから相対化し他者化された学科として存在していたのである。

京城帝大の設立後にも民族の原則に従っていた朝鮮文学史は、そのような「国文学」の本質と原則に離反するものであった。理念の面において、「国文学史」に相対的でありながら、方法の面において「国文学史」を模倣して存在するという二重性こそ、朝鮮に「進出」してきた「国文学史」に対する朝鮮文学史

の性格と言える。

京城帝大の「国文学」講座には、東京帝大国文学の歴史を背負う高木市之助を筆頭に、時枝誠記、麻生磯次、荻原浅男が担当教員として勤務した。その中の一人、高木は、病床で、自身自身の「国文学」の歴史についての最後の二つの聞き書きによって、植民地朝鮮における「国文学」の歴史を記録に残している。その一つは、「自伝そのものが学史」（池田彌三郎「解説」『高木市之助全集』第九巻・五七〇頁）という『国文学五十年』であり、もう一つは「わたしの懺悔録」という副題の『尋常小学国語読本』である。

本稿では、この二つの本に表れた、高木の朝鮮における記憶を中心に、彼の朝鮮での経験や、朝鮮で構想していた「国文学」講座の性格について考察する。まず、高木自身の「懺悔録」によって、彼が朝鮮に渡る前に、朝鮮をどのように想像していたのかを見たい。

『尋常小学国語読本』は、一九二〇年代から、「しがな官僚の端くれ」と高木が自称する「図書監修官」として文部省に入り、教科書を制作した経歴を「懺悔録」の一つとして世に残したものである。高木は、手紙の形式で京城の風景を自ら叙述した文章「京城の友から」に触れながら、「植民地政策の片われ」として京城帝大で活動していた頃の自分とオーバーラップさせて、戦前の自分を「懺悔」している。

これも現地へ行かずに、当時の朝鮮総督府発行の資料や何かを参考にして書いたものです。その資料によれば、京城の周囲の山は大理石できており、松が生えていると書いてあるから、わたしは、日本の風景から連想して白砂青松といったイメージを勝手に作り上げていました。ところが、これは数年後の話になりますが、わたしが新設の京城帝大の教授として現地に赴任して見ますと、まるで想像とは違った景色だったので驚いてしまいました。

（高木述・深査録一九七六・八二頁）

京城帝大に赴任以前の高木の朝鮮経験は、このように想像を通してのみ創り上げられたものであった。高木の言うように「京城の友から」は、リアリズムを欠如していた。朝鮮総督府の資料をもとに、「白砂」と「青松」に代表される朝鮮の風景は、権力が作った恣意的イメージを経由した他者の風景ではない。実際の教科書『国語読本』には、「市街の周囲を取囲んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらは生えてゐます」（同・八〇頁）とある。

その執筆過程において、植民地政策に基づく想像力が作用した。そして、その想像力は「朝鮮総督府発行資料」に依拠するものであった。「本町通」、「黄金町通」、「鐘路通」などの日本名の町や、朝鮮神社、朝鮮総督府、朝鮮ホテル、朝鮮銀行、軍司令部や龍山停車場などの植民地権力の象徴となる建物や施設

で点綴された想像の中の風景こそが、自己Ⅱ日本化された朝鮮のイメージであった。つまり、それは、植民地権力が植民地を自己Ⅱ日本化してゆく過程で形成されたイメージの典型であったのである。

高木の「国文学史」は「世界文学に対する国文学の特質の優越」を実現する任務を担う民族主義に根ざしている。ここで私はいくつかの疑問を持たざるを得ない。高木は「国文学」拡張の伝令士として朝鮮へと向かい、その「国文学」を契機に、異民族である朝鮮人とのような接点のもとで向き合っていたのであるうか。「まるで想像とは違った景色」の朝鮮、すなわち文学史に当てはめて言うところ、「まるで違った朝鮮文学」を前に、高木は自己Ⅱ国文学をどのように表現したのであるうか。この問題が本稿の次の課題である。

三二二 アカデミズムの「国文学」の中へ、そして朝鮮へ

『国文学五十年』の構成からわかるように、高木は自分の学問史を回顧する中で、アカデミズムとの関係を極めて重要な位置に置いている。高木はアカデミズムについて、「東京帝国大学という古城のような威厳に充ち」（高木一九六七・四三頁）ていたと表現し、「当時の赤門のアカデミックなあまりにアカデミックスな空気」（同・五一頁）に孤独感さえ感じていた。そして、自分を育ててくれたアカデミズムの世界は、外部からは隔絶されていたと言う。さらに、肝心な自分さえも隔絶されている、と

いう事実を意識できなかった（同・七九頁）。敗戦後、私学に勤めるようになった時、「帝国とか文部省とかいう拘束」から解放感を感じたほどに、京城帝大当時の「国文学」は「閉塞的拘束的」であったと自分自身を振り返っている（同・一六八―一六九頁）。

日本の制度上の「国文学科」は、一八八九年に帝国大学の「和文学科」が改称されて成立してから、名実ともに「国家学」の基幹学科として、国家主義の権力とイデオロギーを背景に成長していった。「国文学」は「文献学と文芸史研究による国文学の近代化」という経路上を忠実に走り、それが一貫して近代国文学の主流として位置付けられていた（内野一九七四・三五五頁）。

高木が一生担うべきものと感じていたアカデミズム、つまり東京帝大の「国文学科」に入學した当時の主任教授は、上田萬年と芳賀矢一で、その他、藤岡作太郎や保科孝一が在職していた。彼らから、「国文学」とその政治性の洗礼を受けながら、高木の「国文学」は形成された。とりわけ、芳賀が、「日本国民の思想の変遷」として「国文学史」を構想した『国文学史十講』（二八九九、『国学史概論』（一九〇〇）を發表したことは、高木とアカデミズムの関係を論じる上で見逃せない。

一九〇〇年に芳賀は、「文学史研究法」の研究のために、ドイツ留学に向かった。一年半後に帰国してから、「国学とは何ぞや」（二九〇四）などを發表し、科学としての「国文学史」を主唱した。芳賀は、ドイツの文献学者であるアウグスト・ベッ

ク August Böckh の「文献学は、立派に今日の意味でいふサ
イエンス即ち科学と見做すことが出来る」ということばを引用
し、科学としての文献学が成立すれば、日本の国学もまた立派
な科学として成立するだろう（「国学とは何ぞや」、芳賀一九六八…二
三〇頁）、とドイツ文献学の科学性に依拠して、「国文学」の科
学性を提唱したのである。近世日本の「国学」と「ドイツ文献
学」の結合を通してその骨格を形成した芳賀の「国文学」は、
江戸の古学研究の尚古主義や国粹主義的傾向を改めた、「合理
的、比較的、歴史的」な新しい研究方法による、書誌的、文学
史的視点で構成された。⁽⁶⁾

また、芳賀は荷田春満を国学の起源と見る（芳賀一九六八…
二二七頁）。春満が、学問の伝統が不在の状況の中、「国語国文」
に表れた材料を以て「国学」を創始した点に注目したのである。
芳賀は、国学を、「国語国文」に表れた過去の制度、歴史、法律、
文学、語学、美術などの集合体と見なした。すべての「国語国
文」に表れた自国民^ニ民族と、他国民^ニ民族と区別される「国
体」を、その「国文学史」の中で発見することを試みたと言え
る。学問の「分科化」が近代学問の特徴であるとすれば、芳賀
の意図はそれに逆行するように見える。芳賀は「古代の文化一
切の事を知るといふのが文献学者の仕事」（同…三三二頁）であり、
その分科の全体性を堅持する「文献学者は色々な学科をこたま
ぜにやりますけれども、それらの学科はみなばら／＼なもので
はなく、悉く関係したもの」（同…三三一頁）と主張したからで

ある。

さらに、各々の学科間の有機的關係は、古代の文化に存在す
る最も「純粹なる日本的」なもの^ニ国民性の本質によって堅持
されると信じていた。芳賀は「すべての国民性の現れた或る一
つの時代を取つて、即ち比較的に限られた時代に於て、その国
民全体の活動状態、生活状態といふものを今日の国民の前に再
現する」（同…三三二頁）ことを「国文学史」研究の目的に置いた。

このような「分科」の集合体としての国学、「国語国文」を
もとにし、国家の全体性という政治的な洗礼を受けて構想され
た学問という点で、むしろ近代的とも言える。そうでありなが
ら、芳賀の「国文学史」は、伝統的「国学とドイツ文献学の混
血児」（内野一九七四…二二頁）的な性質を有するのである。西洋
すなわち近代から自己へ回帰しようとする精神が背景にある。
「一国の文明は、其国民が造出するものであれば、我国民の思
想感情の変遷を現した文学史の裏面には世界に特殊なる我国民
の歴史が認められる」（芳賀一八九九…八）という視線には、文明
としての西洋と自己とを同一化しようとする意図があつたに相
違ない。藤井貞和（二〇〇〇…一三三頁）の批判のように、「国文学
史」に表れた「人種^ニ文化^ニ民族^ニ」という恣意性に基づく自己
認識は、他者意識や他者表象の産物である。結局、国民一般を
「時代的最大公約数」とし、「太古」から受け継がれてきた自国
文化の同一性を発見しようとする「国文学史」の企図を、一国
史的な言説として、「国家学」が「學術知」へと制度化されて

ゆく過程に明瞭に認めることができる。

東京帝大「国文学科」在学時代を回顧して、「アカデミズムの中へ」という標題を掲げた高木は、「当時は国学といえどもはり学問だと世間では考えられても、国文学となると一向世間に通用しないような時代」(高木一九六七二二頁)であったと言う。そして、芳賀に代表される国学は「未分化の状態」のまま、次第に近代的国文学の形態を取り繕っていく時期であったと捉える。それゆえ、高木は前代の「国学」とも、芳賀の「国文学史」⁽⁸⁾とも異なる方法を模索した藤岡作太郎の著書『国文学全史 平安朝篇』に魅了されたのである。ただし、高木が朝鮮に持ち込もうとした「国文学史」は、芳賀はもちろん、藤岡のものとも既に違っていた。「帝国」の「国文学」として、他者の民族文学を抱き込み、同化させるといふ義務を孕んでいたためである。そのような「国文学史」の伝令士として朝鮮の京城帝大に赴任することになった経緯は、高木の記憶によれば次のようである。⁽⁹⁾

京城帝大準備委員長であった服部宇之吉が、東京帝大国文学科の主任教授・芳賀に適任者の推薦を求めた。芳賀ははじめに橋本進吉を推薦したが、橋本が断つたため、その代わりに高木が推薦された。それは、京城帝大の本科が開校する二年前のことであった。そして、開校準備の二年間は、文部省の留学生としてヨーロッパに行つてもよいという条件もあり、高木は「文学研究法研究の為」(同二二三頁)という研究テーマで、ヨーロッ

パに留学した。それは自分の卒業論文にも大きな影響を与えた「西歐的なものに対するささやかな郷愁」(同二六八頁)を呼び起こしたからであった。ただし、当時の『官職録』によると、既にその間(一九二四・二六年)に、京城医学専門学校の教授に赴任していた。それは京城帝大本科に内定された後の措置であったと考えられる。

帰国後、高木はすぐに朝鮮へと渡つた。高木はヨーロッパという「外氣にふれたせいで」(同二一三三頁、自分の国文学が成長したと信じた。それはほかでもなく彼にとつては民族意識の新たな発見を意味するものであった。高木は「私の思想」(同二一三五頁)と表現した自分の民族主義を、エスベランチストのラザロー・ルドヴィゴ・ザメンホフ Lazaró Ludoviko Zamenhof の思想にたとえた。しかし、実際に朝鮮に渡つて初めて、「本能的に民族の異同」(同二二三六頁)を肌で感じ、むしろ「一番植民政治から解放しなければならないのはほかならぬ国文学の講義ではないか」(同二一三八頁)という矛盾した考えを持つようになった。このような高木の、理想と現実との矛盾は、自分の朝鮮人に対する考えが「超民族的」で、「朝鮮民族に同情するのとはちがひ、もう一皮純粹な」(同二二三九頁)ものだと信じたことから来るものであった。

高木は異民族に対する「本能的な」感覚を持っていたのにもかかわらず、「朝鮮でなぜ国文学か」という根本的な自己懷疑はなく、講義室で朝鮮人の受講生がいることを意外と思うとい

う無自覚に陥っていたのである。

三十三 朝鮮における高木の「国文学」

高木の文章の中で、京城帝大出身者についての回顧は稀である。「国文学への不信不安や挫折失敗」(高木一九六七「あとがき」)の告白であると自ら評した『国文学五十年』では、京城帝大第二期生で「国文学」を専攻した崔載瑞(チェジュン)が唯一であり、他の文章では「国文学」専攻の徐斗銖 서두익을 回顧したに過ぎない。¹⁰

崔載瑞に関しては、次のように記憶している。「親日派」と見られて他の朝鮮人学生に殴られたこともあった崔載瑞が、ある日、飲酒をして高木のところにやって来て、「先生たちはどんなに威張ったって僕達朝鮮人の魂を奪うことはできないよ!」という「凄文句」を並べて帰っていったという(同…一四〇頁)。そこで高木は自分が一四年間意識してきた民族意識を裏返したものを考えなければならなかった。このような日常経験によって、おそらく高木は朝鮮人に関する記憶を意識的に排除したのであろう。朝鮮人についての記憶だけでなく、朝鮮文学について言及することも控えたのかもしれない。また、崔載瑞と同じく、第二回卒業生で、高木の教え子であり、「国文学」専攻の徐斗銖に関しては、「祖国亡命」という副題を付けた回想記がある。戦後に渡米した徐斗銖が名古屋にいる高木を訪問した際、徐斗銖のことを「今もなお昔のままに自国の民族を愛

してやまぬ好漢だった」と回顧した。¹²しかし、それは、高木が民族意識を介して朝鮮人と出会った過去に正当性を与えるためのスタンスに埋没した意識の表れに外ならない。

険のある眼なごしながら韓からびとのなにか親しき夕べなる
かも
(高木市之助全集 第一〇卷・三七七頁)

六月の風冷えごもる城門にかなしく集ふ一群れの民
うす暗く風冷えごもる城門に民草瘦せてうづくまり憩ふ

(「京城郊外偶作」の三首中の二首。同…三七七頁)

高木は長男清之助を失い、その後の心境を歌ったものとともに、京城での日常の感傷を窺わせる若干の短歌を遺している。その中から抜き出した右の三首は、いずれも一九三五年に詠まれた作品である。これからは、先に指摘した、朝鮮と朝鮮人を見つめる、または高木が表現するような、「感じる」という彼のスタンスを読み取ることができる。「超民族的」、または「純粹」という高木の視線が捉えた朝鮮人は、「韓びと」や「群れの民」という、高木からは疎外された日常の中の集団化された存在としてしか認識されていない。特に「韓びと」は、旧韓国のイメージを浮かび上がらせるために、在朝鮮の歌人たちによって頻繁に用いられていた用語である。この用語は、朝鮮人を全体化するものであるとともに、観察者である日本人と対比

される固陋な「旧韓国」のイメージを与えるための装置の一つであると言えることができる。また、観察者の立場から朝鮮人に向けて投げかけた視線があるのみで、朝鮮人の日常と高木の間には相当な「距離感」が維持されている。朝鮮人の日常との、このような「距離感」は、高木が朝鮮を去る直前に遺した一首にさらにはつきりと表れる。

数ふれば去る日は迫り居たりけりこの古き都を去らむとす
るか
〔高木市之助全集〕第一〇巻、三八一頁

「古き都」と表象された京城。一四年間の京城に関する記憶は、高木にとってはやはり日常の記憶ではなかった。それは、日常を超越した固陋な「旧韓国」を想像する、という意識のままに過ぎた経験であったのである。先に『尋常小学国語読本』についての考察において指摘した、朝鮮の風景を自己のイメージで描いた高木を想起してほしい。あたかもそれに関する反省でもあるかのように、高木は「朝鮮の風景に就て」という文章を遺している。この文章で高木は、「三年前、私が始めてこの半島の人となつ」と語り、自分の中の「朝鮮の風景の主調」を探そうとした（高木一九二九・三頁）。高木は教科書『国語読本』の「京城の友から」とは異なるスタンスをとっている。「朝鮮の風景は日本のそれと、その調子がこんな風にながふのではありませんか」（同・六頁）と、両者の差異を指摘する。自分が「半

島の人」になっても、朝鮮人の日常から離れて、観察者としてのスタンスを保ちながら、朝鮮を観察の対象としているのである。このような高木のスタンスは、朝鮮で高木が担当した「国文学」の性格とも深く関わっている。

京城帝大「国文学」講座の教授として赴任した高木の一番の任務は、繰り返し返すが、「国文学史」の朝鮮「進出」のための命令士としての役割であった。高木は朝鮮の「国文学」研究における制度と方法を打ち立てた張本人でもあった。ここで高木が担当した「国文学」第一講座の講義内容を窺うことができる講義名を、雑誌「青丘学叢」の「彙報」によって整理したい。

一九三一年〃小説史—平安朝から室町まで、歴代民謡選、

国語学国文学講義演習

一九三三年〃国文学概論、近古物語演習

一九三三年〃中世文学概説、記紀歌謡講義、万葉集演習

一九三四年〃国文学概論

一九三五年〃上古文学史概説

一九三六年〃平安朝文学史概説、古事記講義、近古文学演習

高木は概説と講義中心の自らの講義について、「大学の講義として失格だった」と自ら評しながらも、「外部からの経験」から得た民族意識によって思い付いた「歴代民謡選」という講

義だけは高く評価した（高木一九六七・一五〇頁）。「歴代民謡選」の講義は、数年間に亘って開設した、という高木のことばからは、一九三一年以前にも数回開設されていたことがわかる。高木によれば、彼の民謡に対する関心が、京城行きを受け入れた理由の一つであったかもしれない。それゆえ、高木はヨーロッパで民謡に関する本を収集し、朝鮮に渡ってから民族問題に関連する民謡研究を構想し、第一講座においてそれを実践したと見られるのである。

しかし、講義名だけでは、当時の高木の「国文学」について語るにはあまりに不十分である。この点に関して、高木が京城を離れて、九州帝国大学（以下、九州帝大）に赴任してから、初めて刊行した単行本『吉野の鮎』（岩波書店、一九四一）は、それを把握するための重要な手がかりを提供してくれるものと言えらる。高木は『吉野の鮎』の「序文」において、京城の生活は「私の雑事にわずらわされながら、ともかくにも読みかつ考えの生活を恵まれていた」として、その恩恵の結果として、自分が「学界に負うべき義務は、私が京城でこのように読みかつ考え得たことをこのさい一つの学問的な仕事にまとめて世に問うこと」であると記す（『高木市之助全集』第一巻、二三頁）。こうした契機で出版された『吉野の鮎』の中に収録された論文は、全て雑誌や講座類に既に発表されたものである。この本に「記紀万葉雑攷」という副題が付けられているように、一九編の論文は『古事記』と『日本書紀』、そして『万葉集』に収録された歌謡、

すなわち「記紀万葉文学」が「民謡的なものと創作的なもの」の「帰一相即」の関係にある文学という点を考察したものである（同：三四三頁）。

その中で、「日本詩歌の母胎への一考察」（一九二八）、「古代民謡史論」（一九三二）、「日本文学における叙事詩時代」（原題「叙事詩と上代文字」、一九三三）、「日本歌謡における童謡の痕跡」（原題「倭建命御葬歌に就て」、一九三四）、「民族文学としての記紀歌謡」（一九三五）、などを含む一五編の論文が京城で書かれたものである。高木は早くから日本における「叙事文学の貧困」に注目し、『平家物語』を叙事文学と規定して、ウィリアム・P・カー William P. Ker の著書 *Epic and Romance* を参考にして、卒業論文「叙事詩として見たる平家物語」を書いた。その後は、ひたすら中世文学、特に「叙事詩への夢」を抱き、さらに「古代遍歴」、すなわち「古事記」と『日本書紀』、そして『万葉集』の研究を始めた。この事實は、先に示した高木の京城帝大での講義と、当時の研究成果である『吉野の鮎』の構成を通して知ることができ⁽¹³⁾。このように高木の講義と研究成果が一貫性のある関連をもつて結びついている事実注目したい。

特に、朝鮮行きに先立って、またヨーロッパの経験を通して抱いた民族意識に発する民謡研究への関心から設けられた講義「歴代民謡選」は、「国文学特殊講義」という講座名で開設されたものであった。先述したように、この講座に対する高木の自らの評価は、これと深い関連がある「日本詩歌の母胎への考察」

と「古代民謡史論」で、まずは検証可能である。とりわけ後者は、一九三二年四月に『岩波講座日本文学』に収録されたことから、日本文学史における民謡と民謡史の位置を、高木がどのように把握していたのかを示す論拠の一つと言える。それにとどまらず、朝鮮の民謡と文学に関しては、一九二九年一月に高橋亨と朝鮮文学専攻者らとともに濟州島民謡の採録のための踏査に参加した後、「民謡と文学（濟州島の民謡から）」（『朝鮮研究』第4巻第1号、一九三二・二）を発表している。

ここでまず、「朝鮮文学」講座の高橋と門下の学生らが行った朝鮮民謡研究との関連について見ておきたい。特に高橋は、朝鮮人学生らとともに採録した後、日本語翻訳資料による学界への紹介を精力的に行った。一九三一年には「朝鮮民謡」という講義を開設したこともあった。高橋の主導した「朝鮮文学」講座という次元で行われた民謡研究は、朝鮮人の民謡研究にとって大きな刺激剤となった。その中でも最も影響を受けたのは、第二回卒業生の李在郁^{イジュ}であった。彼の卒業論文のテーマは「嶺南民謡の研究」である。李在郁だけでなく、金在喆^{チョル}、金台俊^{キムテジュン}、召在烈^{チョル}など京城帝大文学科出身者による朝鮮民謡研究が活発に行われるようになったのは、彼らが主導した「신흥」（新興）、「조선의 민화 회보」（朝鮮語文学会報）が発刊された後の一九三〇年代からである。¹⁵

ここで、京城帝大文学科第二回卒業生である李在郁、金在喆、金台俊¹⁶らと、高木が民謡研究を講義した「国文学特殊講義」と

の関わりについて触れたい。彼らは高木の「国文学特殊講義」を受講していた。朝鮮の民族文学史において、民謡の文学ジャンル化が図られてゆく過程で、高木はこの講義を通じて彼らと関わったのである。注（15）に挙げたC・R「民謡研究参考書」に紹介された外国書籍の提供元に関して、それらが高木の「国文学特殊講義」ではないかと思われる。ヨーロッパで民謡研究に関連する書籍を高木が購入したという事実と、それを用いて民謡研究に関する講義をしたという事実から、そのように考えられるのである。特にC・R「民謡研究参考書」の出版を、T・F・ヘンダーソンの*The Ballad in Literature, etc.*としているが、この本は、「国文学特殊講義」で講義された民謡研究を総合する性格を有する高木の論文「古代民謡史論」において、重要な参考文献とされたものである。もちろん、「朝鮮文学」講座の高橋亨には、民謡研究に理論的にアプローチした論文は見当たらない。高橋は抜群の朝鮮語力をもとに、日本語訳と注釈に主眼を置いて朝鮮民謡を考察するに止まっている。¹⁷

ところで、『吉野の鮎』において提示された「民謡」以外の、「日本詩歌の母胎」、「童謡」、「民族文学」というキーワードは、京城で高木が行った研究テーマの中心に位置するものである。このようなキーワードに含まれる、「外部からの経験」と植民地民との出会いを通じて直感的に得られた民族意識は、高木にとって国文学研究という実践によって実体化した、重要な「定型の因子」（『高木市之助全集』第一巻・五八頁）であった。

当時、日本では民族心理学、神話学、人類学など、「国文学」周辺の学問領域において、日本歌謡の母胎に関する研究が行われていた。高木はそれを「民俗学的諸学の進出」(同…一四二頁)と表現した。しかし、彼はそのような動向に便乗することに反対していた。文学研究の独自性を強調し、「古事記」に収録された比較的成立が古い歌謡を対象に、詩形式の具体的な調査統計を出して、日本歌謡の原型を求めめる作業に邁進した。実証主義的な研究態度で形態面を調査し、それによって最も原型に近い形式を見つけ出せると考えたのである(同…一五三頁)。

そして、「古代民謡史論」では、古代歌謡の中で鼓動する民謡性の活動を否定できないとして、この民謡性が、古代から中世にかけて日本文学を中心の位置をほぼ保ってきた短歌の形成母胎であると同時に、それ自身が将来日本文学の主流となる重要な文学性の一つと見た(同…一五二頁)。また、「定型の因子」として、五・七言句の歌謡形式を中心とする民謡性を、内容面で叙事性を有する伝説が「最も重要なその源泉」(同…一六三頁)と考えた。この論文では、日本歌謡研究における歌謡の形式と内容を統一的に捉えるために民謡性を構想したが、さらに、その形式と内容(精神とも表現)の統一的な形成過程において、高木が民族意識の原型を具体的に論じたのが「民族文学としての『記紀歌謡』」(一九三五)である。この論文では、和歌の形態上の成立過程を五段階に設定し、その「原型」の例を「『記紀歌謡』」の中に探り当てて示した。五段階の形態上の変化に沿って、「記

紀歌謡」の表現されている精神(内容)もまた、そのまま「和歌的精神の成立過程を示す段階」(同…一〇九頁)であるとも考えた。このようにして調査した「和歌の形態を持つ諸歌謡の精神(内容)」は、その形態と「表裏」の関係にあり、「『記紀歌謡』」に和歌成立の母胎を見ることができるとした(同…一二二頁)。

日本歌謡史に表れた(歌謡の)「形態と精神」が表裏する(同…一二二頁)、と高木が主張した理由は、歌謡史自体を民族史と一体化させるためであった。高木が民族史を遡及しながら没頭した、民族歌謡の「原型」を探す方法は、その理念と意図が何であつたかを明瞭に示している。

特に、高木がこのような意図のもとで発表した研究論文が、京城帝大在職時に執筆されたものであるにもかかわらず、ほぼ全てが「内地」の学術の場を通して発表されたという発表空間の問題を、私は極めて重要なことと考える。先述したように、高木は京城帝大の「国文学」講座の建設者であつた。しかし、『吉野の鮎』に収録された論文を見ると、その中の京城時代に書いた一五編の論文のうち、『京城帝国大学文学会論纂』第二輯「日本文学研究」(一九三五)に発表された「古事記歌謡における仮名の通用についての一試論」の他、全ての論文が「内地」で発表されたものである。

つまり、朝鮮では高木は、京城帝大が発行した論集以外に論文発表の紙面を持っていなかった。しかし、日常についての随想は、朝鮮総督府発行の「朝鮮」や「朝鮮及満洲」、「京城雜筆」

などに発表していた。それは高木に限らず、「国文学」講座の教授全般に見られる傾向である。時枝誠記や麻生磯次も同様であった。特に、朝鮮史編修会委員と京城帝大の史学、文学、哲学関連の教授たちが中心となって「朝鮮及滿洲を中心としての極東文化研究並にその普及を目的とする」研究団体である「青丘学会」に高木は一九三二年八月から参加したが、学会誌「青丘学叢」には一編の論文も発表しなかった。時枝と麻生は最後まで参加しなかった。朝鮮社会の人文学全般に互って学術活動をする人々で構成されたのが「青丘学会」であったのにもかかわらず、「国史学」講座とは異なり、「国文学」講座は参加しなかったのである。

このような事実からは、「国文学」研究の場合、朝鮮社会全般に互って、制度的にそれほど大きな成果を上げることができなかったか、それとも「国文学」研究が朝鮮社会の学界から疎外されていたか、と予測できる。彼らが見せた学術研究上の充実にもかかわらず、これら二つの予測は、朝鮮で「国文学」研究を制度的・量的な面で、普及させ、再生産することが疎かにされていたことの根拠となるかもしれない。「青丘学会」と関連して付け加えると、これら二つの予測はいずれも「朝鮮及滿洲を中心としての極東文化」とは絶縁したものととして「日本文化」を想定したことに関わるものであると見て間違いない。それはまた、民族と文化と言う概念を理解する根本的な認識の問題とも深い関係があると思われる。それは、まさに言語の本質

についての彼らの認識の問題であり、歴史と異なる文学史の持つ閉鎖性と関わっていると云えるのではないか。

高木が「国語」教育に関して書いた唯一の論文である「朝鮮の国語教育について」（一九三六）にこのような思考を窺うことができる。この論文は高木が視学委員として在職していた時に、朝鮮人に「国語を学習するのに何が六かしいか」を調査した結果を整理したものである。掲載先が「京城帝国大学創立十周年記念論文集 文学篇」であるだけに、「なにか朝鮮に縁のある」ものを「大急ぎに」まとめたものであると高木は記す。この論文には、高木が朝鮮での研究学会と学術誌に参加しない傾向を示した根拠と考えられる、朝鮮人にとつての「国語」と母語の関係についての問題提起がある。高木は、「国語」教育において、日本人と朝鮮人の間の「教える者」と「教わる者」の授受関係は「複雑隠微な関係」を生み出しており、その根本的理由は、朝鮮人にとつて「国語」は母語になり得ないところにあると見た。この考えは、言語の本質主義に基づくものである。すべからく「国語」は、最も重要な使命である「国民精神の鼓吹涵養」のため教育されるべきであり、朝鮮読者の立場から新たな教育方法を立てなければならぬと高木は力説した。言語の本質性と立場の相違に基づいて朝鮮での「国語」教育が実施されるべきであるという高木の考えは、彼の「国文学」にも当てはまる。このような高木にとつて、朝鮮は「国文学」のための学術の場たり得なかつた。

つまり、高木は「国文学」の本質性と優越性に基づく考え方をとっていた。「国家学」それ自体の存在の仕方は、「主導性・規範性」の立場を維持するところにあると考えたのである。このような「国家学」の「主導性・規範性」に関する高木の考えは、九州帝大に赴任後に明確になる。

この考えをはっきりと示している文章が、一九四三年に発表された「大東亜建設と国語国文学のありかた」（日本諸学振興委員会編「日本諸学」第4号、一九四三・一〇）である。もちろんこの文章を読む際には、「大東亜戦争期」であるという時宜的条件に朝鮮があることを考えなければならぬ。高木も、自身の論を展開するにあたって、「冷静に学を实践する態度を」「時局の緊迫を意識しない非国民的態度として排撃」することはあつてはならないとして、「和」の精神を主張している。そして、「大東亜建設」のための「国文学」の使命を語る時、「学」としての日本語・日本文学と、「方便」としての日本語・日本文学（例えば、「大東亜」諸民族の教育のための「簡易化された日本語」）が、「同位同列」ではあり得ず、その差異の根本には、「前者である」「国文学」の「主導性・規範性」があると論じた。京城帝大在職時と「大東亜戦争」期をとではプロパガンダの煽情度に差があるとはいえ、高木の根本的な認識構造に違いがないことが、「朝鮮の国語教育について」と「大東亜建設と国語国文学のありかた」という二つの論文によってわかる。

三―四 「空虚な中心」としての「国文学」

高木の論文「民族文学としての記紀歌謡」で明確にしているように、「民族文学の「民族」は個人性または個性に対する「民族」(folk, Volks)の意」（高木市之助全集「第一巻：一〇一頁）であった。当時の「国文学史」再構成の過程、特に歌謡史ないし和歌史についての記述において、この「民族」という概念は、民俗学や神話学などの周辺の学問の影響に対して反証するものである。

西郷信綱（解説「高木市之助全集」第一巻：四八二―四八三頁）が高木の『吉野の鮎』を折口信夫の代表的著作『古代研究』と比較して指摘したように、折口の「類化性能」と大別される高木の方法論は「別化性能」であり、差異点を浮き彫りにするという性質の強いものであった。²⁰すなわち、「類化」が民俗学や神話学では当然視されるのと違って、文学は固有の独自性を発見することが何よりも重要なことと見なされていたのである。

高木にとって、「民族」は一定の帰属意識を前提とする集団を意味した。さらに、この「民族」という用語は、「文化」や「未開」ということばの背後に結び付き、本質的に異なる層位のみさまざまな民族文学を区分して論じる根拠として使われている。「民族文学としての記紀歌謡」では、これまで民族文学として扱われてきた「記紀歌謡」がどのような種類の民族文学かを論じながら、「民族」を「文化」と「未開」という二つの「層位」に区分する。

(一) はわれわれ文化民族がその文化の初期において、文学に個性が十分表現されていないための民族文学であり、(二) は同じく文化民族において、すでに文化が発達し、個性を表現する文学が創作される一方に行われている民族文学であり、(三) は今日の未開民族中に求められる民族文学である。(同…一〇二頁)

(二)と(三)は比較的低級な文学であり、「記紀歌謡」は「日本の古典文学における、ほとんどあらゆる韻文の母胎」(同…一〇五頁)となる代表的文学であり、(一)に属するとした。特に「記紀歌謡」の中で、和歌の形態を有する全ての歌謡の精神について調査した結果は、これに先立って形態について調査した結果と完全に一致するとして、このような形態と精神の表裏一体の関係を手がかりに、「記紀歌謡」が和歌の「原型」の位置に立つことを主張した。つまり、「記紀歌謡」が和歌成立の母胎と判断したのである。この論文以前の「日本文学における叙事詩時代」において、高木は「叙事詩的な文学」の発生条件として、「共通類似の社会状態」^{II}「英雄時代」を提示し、この段階を経験した民族を「文化民族」と規定する用語として使用している(同…八八〜九四頁)。この時、高木は「文化民族」を「位置風土その他の外的事情」などの地政学的条件によるだけではなく、それよりも本質的な「欠陥」(同…一〇三頁)のある「未開民族」に相対するものとして意味を規定している。

当時、民俗学や神話学では「文化民族」を通時的な段階として設定していたのに対して、高木は、「未開民族」と共時的に存在する、個別の内在的な属性に注目したのである。それゆえ、ここで「民族」は、高木が「民族文学」を定義しながら使用した *folk* が、文化水準を基準として区分された不変的かつ自然な統一でないし生活体の意味に入れ替えられていると言える。このように同一の論文で、両義的に使用された「民族」または「民族文学」という用語には、つまるところ、その深層に強い帰属意識が潜んでいた。その結果として、民族文学を研究する高木としては、植民地体制という当時の状況ゆえに、朝鮮での「国文学」研究という範疇を、意識的にも無意識的にも京城帝大の外部に拡大しようとはしなかったと考えられる。このような意識の中には、朝鮮民族を相手に本能的に「民族の異同」を感じた帰属意識に止まらず、「国語」によって成り立っている学問である「国文学」という権威に対する強い執着も存在していたはずである。

民族文学史は結局、民族理念を背負った正典(キヤノン)の選定という過程を必ず経ることになる。デイヴィッド・バイアロックの論文「国民的叙事詩の発見―近代の古典としての『平家物語』」(シラネ、鈴木編一九九二:二五九〜二六四頁)は、この視点から、『平家物語』の正典化の過程で重要な役割を果たしたとして、高木を評価すると同時に批判している。本稿では、民謡性と民族文学という範疇に注目した高木の「国文学史」が、果たして植民

地（朝鮮）の文学とどのように関連していたか、という点に關心を置いてきた。そして、民族と民衆とを一体視する思考に基づいて、民謡性を有する文学を民族文学の本質として捉えようとした高木の意図に注目した。近代におけるこのような正典の選定は、「文学」の定義に関わるものであると同時に、「民族的なもの」についての定義とも関わっている。ハルオ・シラネが指摘したように、「創造された正典」は共同体がそのアイデンティティを形成するために、文化的過去を構築する「記憶の政治学」（同・四一頁）と深く関わっているのである。

日本近代における、民衆文化と正典の形成をめぐる最も重要な議論は、明治末期と大正初期の「民俗学」概念の登場とともに始まった。これに先立つ明治中期の「国民文学」形成の動きは、天皇と国民が一体であることを強調したが、この動きと対照的に、明治末期以降の「国民文学」運動は、雑誌「帝国文学」（一八九五―一九一七）を中心にドイツ浪漫主義とハインリッヒ・ハイネ、グリム兄弟などの西洋のフォークリストの影響を受けながら展開した。その中で、民俗、伝説、神話、民謡などが、古代から民族共同体として日本民族の真髄を体現したものと考えられた⁽²¹⁾。

高木も「帝国文学」の議論が自分に与えた影響について語ったことがある。ただし、折悪しく、高木にとってその実践の場は、京城帝大、すなわち植民地朝鮮だったのである。「国文学史」は、高木に、民族共同体を体現する原則と理念の確立に加えて、

植民地の融合と同化という新たな任務を与えた⁽²²⁾。しかし、先述したように、高木の方法が「別化（性能）」にあっただけに、むしろ彼は植民地の民族文学史とは絶縁したところで「国文学」研究に邁進し、学生らを指導した。もちろん民族正典の形成は文学史の編制は、支配と解放の両方の手段として作用し得る。しかし、高木にとって、朝鮮文学史は、当然のことながら、個別的なものと同定されるに止まった。それゆえ、自己回帰のための高木の「国文学史」は、権力が意図したもの、つまり朝鮮文学史の融合と同化を放棄した、と結論付けられるように見える⁽²³⁾。しかし、民族の差異を表わすものとして言語の本質を認定した高木は、学問としての「国文学」と方便としての「国文学」とを区別したことに表れているように、「国文学」講座自体の権力性は、全ての「差異」さえをも認める「空虚な中心」（バルト一九九六）と等しいものであり、結局のところ、植民地の文学史はもちろん、植民地知識人の内面まで融合し同化する磁場の役割を果たすしかなかったのである。すなわち、高木が志向した個別としての「国文学史」も、植民地の文学史を融合し同化する言説とは決して無関係ではなかった。それは、戦後の高木の「懺悔」（『「国文学」再構築の過程』）を通してだけでなく、韓国においても大学制度や、制度としての「国文学史」（『韓国文学史』）の形成過程に排他的民族主義が深く作用した歴史からも確認できる。

高木の自省的なことを借りれば、「閉塞的拘束的」な「国

文学」が、他民族と関わった後の歴史と記憶は、今日の我々の間にどのように残存しているのか。また、韓国社会は果たして帝国の「国文学」の歴史の記憶から、完全に自由となつて、他者として日本文学に向き合っているか。私は、京城帝大の「国文学」講座についての本稿の考察によつて、ポストコロニアルの問題についての再解釈を求めたい。

四 終わりに

京城帝大「国文学」講座は、初めて「外地」に「進出」した「国文学」という意味において、帝国日本におけるアカデミズム（帝国大学）のあらゆる「国文学」講座とは異なる様相を見せる、新たな存在であつた。本稿では、「国文学」の朝鮮「進出」の伝令士として朝鮮に渡つていた時期の高木の経験を、彼の「国文学」研究に関連付けて考察した。

高木は、朝鮮を「国文学」研究のための学問的実践の場と見ていなかった。「国文学」を専攻した朝鮮人も徐斗錫と崔星熙の二人に過ぎない。それゆえ、高木は、権力の意図した、国民の歴史「国文学史」による、朝鮮人の歴史「朝鮮文学の融合」と同化を放棄したかのように見える。しかし、高木の「国文学」講座そのものが帯びた権力性は、解放以後も韓国文学史の内面意識にまで浸透していた。特に民族文学史の記述や、制度史に深い影響を及ぼしたのである。

解放直後、「国文学」韓国文学」研究に携わる者たちにとつて、

過去の「国語」日本語や「国文学」日本文学」は、その内面の奥底に支配者として記憶されたことを挙げたい。当時、京城帝大の「朝鮮文学」専攻者たちが中心となつて民族文学史を新たに記述する時にさえ、「国文学」とは容易に命名できなかったほどに、「国文学史」日本文学史」という過去の記憶に繫縛されていたのである。

「国文学」講座そのものの権力性は、あらゆる「差異」をも認めてしまふ「空虚な中心」のようなものであつたために、結局のところ、植民地の文学史はもちろん、植民地知識人の内面の何もかもを融合・同化させる磁場の役割を果たした。それは、戦後の高木の「懺悔」（「国文学」再構築の過程）を通してではなく、解放後の韓国における大学制度や、制度としての「国文学史」（韓国文学史）の形成過程に、排他的民族主義が深く作用したという歴史からも確認できる。民族文学史としての「国文学史」（韓国文学史）の記憶は、「国文学」日本文学」を排除するしか選択の余地はなかつた。しかし、そこに作用していた排除の政治学は、過去（歴史と記憶）の「国文学」日本文学」の「空虚な中心」という権力を模倣していた。「国文学」日本文学」を転倒させる形で、新たな「国文学」を誕生させたのである。それは、国民国家の建設過程と不可分の関係で進められた。

一九六三年に韓国の大学に日本語学科が開設されるまでは、大学制度において日本語や日本文学は徹底的に疎外されていた。

今日では、韓国のほとんどの四年制大学において、「日本語」や「日本文学」に関わる学科が開設されている。その上、「日本文学」関連のいくつかの学会も存在し、精力的に活動を続けている。解放後二〇年近く、日本に関わる学科や学会を組織すること自体が、権力の政治的判断に委ねられてきたのである。

現在では、過去のような現実も存在しない。しかし、そうであるからと言って、内面の奥底に位置付けられた帝国「国文学」の歴史としての「日本文学」の記憶から、我々は完全に自由になつていけると言えるであろうか。

注

(1) 「朝鮮大学」(大学設立に関する議論が始まった頃にはこう称していた)の設立が公論化されたことにより、朝鮮総督府傘下の学務局と本国のアカデミズムの間で、既得権に関する論争と葛藤が起こった。京城帝大がこの論争と葛藤を総合的に解決しながら開設されたということが、創設当時の教授の構成をみればわかる。

(2) 麻生磯次は一九二一年から二年間、朝鮮総督府学務局編輯課で編修書記であったことがあり、京城帝大へ赴任して初めて朝鮮に来たものではなかった。

(3) 高木市之助の朝鮮行きや、高木と時枝誠記の関係については、『国文学五十年』、および「時枝誠記を惜しむ」(『高木市之助全集』第九巻での題は「その学問と風格について」)と「時枝さ

んの思い出」(ともに『高木市之助全集』第九巻)参照。

(4) 「朝鮮文学」講座は、小倉進平と高橋亨の第一講座と第二講座で始まる。しかし小倉は、一九三三年に東京帝大の言語学科へと離任してからは、京城帝大では兼任講師として夏休みなどを利用した集中講義のみ出講していた。一九三九年に、高橋が定年退職となり欠員が生じたところに、キム テジン 金台俊召キム テジン (支那語学・支那文学)第二回卒業生)を務めさせるが、助教教授ではなく講師としての採用であった。「朝鮮文学」講座は、「国文学」講座とは異なり、教員の採用面において徹底的に疎外されていた。

(5) これは、はじめ雑誌「文学」に、一九六五年四月から十一月までの間、八回にわたり聞き書きの形で連載されたものである。記録係は、村上学の他三名(中西達治、久野孝昭、深宣和男)が担当した。高木は岩波書店で出版された単行本(一九六七)の「あとがき」で、この本の性格について「国文学への不信不安や挫折失敗を告白して」ものだと述べている。

(6) 芳賀矢一が国学の科学性について信頼を寄せることができたのは、ドイツ留学を通して得た日本国文学とドイツ国文学との類似性による。しかし、芳賀が、ドイツ文献学によって「国文学史」の研究法を見つけ出そうとしたのは、単にその類似性からではなく、時代の要請に因應するためであった。一九世紀ドイツは「国家統一」と「後進の近代的な編制」を急速に挽回する必要から、自国の封建制を清算する過程で、他の先進国の持つ近代性を早急に取り入れようと試みていた。このような時代の流れの上で

生まれたと言えるドイツ文献学 Philologie)と、民族のより多くの文献を通して、民族の精神を表明すること第一目標としていた。それは、明治三〇年代の日本と、当時の国学が近代化を急がねばならなかった事情と正に一致していたのである(内野一九七四・三八六―三八七)。

(7) 芳賀矢一は、文学とは「階級の如何を問はず、専門の如何に関らず、凡て人とし人たらん者に普通なる知識と、普通なる感情とに訴へて多少の興味を有するもの」(『国文学読本緒論』、芳賀一九六八・一九七頁)であり、「普通識と普通情の発達は一国土の文明開化に於て尤も重要な元素たることを知るべし。是に於てか文学のすべきことも亦知るべきなり。蓋し文学は其終極の意味に於ては、一国生活の写影なり。人民思想の反照なり。普通の識情を表彰する同時に普通の識情を發進し、社会の動力より生じて亦自ら社会の動力となり、果となり、因となりて社会の發達進歩を促すものなり」(同書・一九八頁)と述べた。特に「普通」を強調しているように、芳賀は近代の均質性に注目した国家主義者であり、民族主義者であり、浪漫主義者的な立場に立つ者であった。

(8) 秋山虔「解説」『国文学全史 平安朝篇』(平凡社版)・三四五頁。その他にも風巻景次郎「芳賀矢一と藤岡作太郎」(一九五五)参照。

(9) 藤岡に対する高木の記憶と評価を見よう。「先生の『国文学全史 平安朝篇』が刊行されたのは私が中学生の時分だった

らしいが、三高に入って間もなく私が私の学資の大半を割いて再版本を購入しえたことはそのまま私の国文学コースを決定し、そして本書に対する魅力はやがて著者への憧憬へ形を変え、この憧憬がさらに東京への魅力に変わっていったものようである。私は今日の立場に立って今この国文学界における最初の学位論文の書評を試みようなどとは思わないけれども、ただ先生が当時の高等学校や大学の学生に与えた威力とか感化力とか、それに匹敵したものを今日の学界に求めたらいったい誰に当たるだろうか」と述べ、そして藤岡の著書の魅力は「アカデミズムを越えた評論的な視野の広さがあつた」と評価し、「虚勢を張つた帝大アカデミズムに対する無意識に近い反発の中に、それとは異質な真の偉大さに近いものをこれも半ば無意識のうちに先生には感じていた」と高木は述べる(「李花亭の記」『高木市之助全集』第九卷・四四四―四四五頁)。藤岡は高木が入学して間もなく死去した。しかし、高木の「アカデミズムを越えた評論的な視野の広さ」を持つとされる藤岡に対する評価とアカデミズムに対する反逆は、額面通りに受け止めてよいか、少し疑問が残る。なぜなら、『国文学五十年』を書いた(記憶を回顧して陳述した)当時(戦後)には、既に「国文学史」の地位と理念が大きく変化していたからである。

(10) 本稿では高木が「国文学史」の伝令士として朝鮮に渡り、朝鮮を「感じて」、自身の国文学を通して朝鮮文学とどのような接点で出合ったのかを考察する。よって高木の国文学研究に表れ

た本質的な問題とは異なる一面を見せるかもしれない。その問題に関する研究は本稿以降に改めて検討しなければならないが、ここではその本質的問題である「差異と同一」については念頭に置かず、朝鮮または朝鮮文学の周辺としての高木の国文学という限定された範囲で論じていきたい。

(11) 京城帝大に関係のない朝鮮人に関する回顧は、高木にハンゲルを教えてくれた道庁勤務の「洪さん」と、「オールドミス孫さん」という人についてだけである。

(12) 高木市之助「英利世夫と徐斗鉢―祖国亡命―」「高木市之助全集」第九卷、一九五〇―一九六頁。徐斗鉢の他にも朝鮮人として、国語学国文学を専攻した人物は、第七回卒業生（一九三六年）で、「近世怪異小説研究」という卒業論文を書いた崔星熙(최성희)がいた。しかし、崔星熙はさらに法学を専攻し、一九三八年に法学士を取得した。

(13) 深萱和男(「解題」「高木市之助全集」第一卷、四八九頁)は『吉野の鮎』の内容を五部に分けて次のように整理している。(1) 記紀歌謡を創造した詩精神について論じたもの(二編)、(2) 記紀歌謡の文学史的意義について論じたもの(五編)、(3) 日本詩歌の源流を考察したもの(二編)、(4) 記紀歌謡の用字法について(四編)、(5) 万葉集に関する論(六編)。

(14) 青丘学会刊行の「青丘学叢」(第4号、一九三二・五)の「彙報」参照。

(15) 「新興」に収録された、民謡に関する文章は以下の通りである。

金在喆「朝鮮民謡漫説」(一九三二、5号)、李在郁「所謂「山有花歌」と「サンユヘ」「ミナリ」の交渉」、趙允在(조윤재)「嶺南女性とその文学」(以上、一九三一、6号)。また、「朝鮮語文学会報」にはついで以下の通りである。C・R「民謡研究参考書」(一九三二、1号)、K・C・C「アリランと世態」(一九三一、2号)、八公山人「郷土研究一瞥」(一九三二、3号)、李在郁「歌謡の研究と整理は如何にするか」(一九三二、4号)、趙允済「朝鮮詩歌の原始形」(一九三三、7号)。以上のイニシャルの中で、C・RとK・C・Cはそれぞれ李在郁と金在喆であろう。そして、八公山人は確実ではないが、ユジュンピル 유준필は李在郁と推測している(형성기 국문학 연구의 전개양상과 특성)。「形成期国文学研究の展開様相と特性」、ソウル大学博士論文、一九九八、一四八頁)。

(16) 朝鮮の小説史と漢文学史の著者でもある金台俊の場合は、李在郁、金在喆に後れて朝鮮歌謡と民謡への関心を示した。卒業後に、「新興」「朝鮮語文学会報」などを通じての、朝鮮文学に関する相互の学的交流によるものではないかと考える。特に金台俊は一九三三年発表の「歌謡と朝鮮文学」と、その翌年発表の「朝鮮民謡の概念」において、紹介されていた西洋の民謡理論の受容を通して朝鮮民謡を検討している。特に「朝鮮民謡の概念」で紹介した西欧の民謡理論としては、トーマス・F・ヘンダーソン Thomas F. Henderson の *The Ballad in Literature* を主として、セシル・J・シャープ Cecil J. Sharp の *English*

Folksongsとフランシス・B・ガメア Francis Barton Gummey
『Old English Ballads: The Beginning of Poetry など提示して
いるが、これらも高木の「国文学特殊講義」において検討され
た研究書と思われる。

(17) 高橋と京城帝大「朝鮮語学・朝鮮文学」講座に関する研究は、
私の「京城帝大「朝鮮語学・朝鮮文学」講座―高橋亨を中心に」
(二〇〇三) 参照

(18) その他の論文は、「文学」に三編、「国語国文」に二編、そし
て「国語と国文学」、「上代日本文学講座」、「国文学と日本精神」
(藤村作博士功績記念会編)、「国文学 解釈と鑑賞」、「短歌研究」
『万葉集講座』に各一編ずつ発表されたものである。そして、『吉
野の鮎』には収録されていないが、京城帝大時代に書いた論文
としては、先に触れた「民謡と文学(済州島の民謡から)」の他
に、「山家鳥虫歌と近世民謡の一面」(京城帝国大学編『日本文
化叢考』(京城法文学会第二部論纂) 刀江書房、一九三二)、「朝
鮮の国語教育について」(京城帝国大学編『京城帝国大学創立
十周年記念論文集 文学篇』大阪屋号書店、一九三五) など、
僅か三編しかない。

(19) 「青丘学会会則」(「青丘学叢」第1号、一九三〇・八) 参照。

(20) 「類化性能」と「別化性能」ということは、元来折口信夫が
『古代研究』で比較能力に関して述べたものであり、折口自身は
「類化」を方法とする傾向があると診断した。それと比較して、
方法論的に対極にあるものが高木の方法論であると西郷は指摘

する。しかし、それは、民俗学における類型化作業、または類
同性の発見と、個別(民族単位)文学における固有の独自性の
発見という、もともとの方法的差異であるのかもしれない。

(21) これに関する議論は、デイヴィッド・バイアロック「国民叙
事詩の発見―近代の古典としての『平家物語』」(シラネ、鈴木
編一九九九) 参照。

(22) 日本「国文学史」の形成と性格をナシヨナリズムとの歴史的
関係から考察した中山昭彦(「文学史」とナシヨナリティー」
(二〇〇二) 参照。

(23) この点は、先に高木が記憶の中の朝鮮人学生たちについて取
り上げたとき、朝鮮人学生たちが民族愛・愛国的な理念を志向
していたと紹介した彼の態度とも関連がとも言える。自民族
以外の民族に対する距離感または絶縁の認識が、日常の朝鮮に
ついての高木の記憶にも、学問の上にも同様に表れたものと見
られる。しかし、問題はそれ自身が持つ意味である。彼もその
意味を知っていたので、亡くなる直前のインタビュー「わた
しの懺悔録」で、「わたしもまた植民政策の片われとしての責任
を免れることができないということをあらためて感じていると
いうことを、懺悔したかったです」と告白する(高木述・
深萱録一九七六・八六頁)。

(24) ここに当時記述された文学史を列挙してみよう。国文学会『国
文学史』(一九四八)、李明善(イ・명선)『朝鮮文学史』(一九四八)、
金思燁(김사열)『朝鮮文学史』(一九四八)、趙潤濟(조윤제)『国

文学史」(一九四九)がある。特に国文学会は、方鍾鉉(ハシジメヒシ)、현(六回)、鄭鶴謨(シヨシハクモ)、정호모(七回)、具滋均(クシジキユン)、김영근(シヨシキム)、孫洛範(ソンナクム)、鄭亨容(シヨシヒョンヨク)、정영용(以上、八回)、固定玉(고정옥(二一回))ら、京城帝大出身者が、一九四八年六月に大学教材の製作のために組織した会である。彼らのような京城帝大出身者が先駆的に「国文学史」を執筆したという点と、それが大学教材のために記述されたという点に極めて重要な意味がある。自分たちが修学した京城帝大「国文学」講座の影響のもと、「国文学科が制度化される必要性」を誰よりも早い時期に主張した彼らは、そのため「国文学史」と命名し、これを執筆できたと考えられる。その他の著者たちも、趙潤濟(一回)はもちろん、金思燁(二〇回)と李明善(「支那文学」講座、二二回)も京城帝大の卒業生であった。そのうち、金思燁と李明善が国文学史とは言えず「朝鮮文学史」と言ったのは、まさに過去の「国文学史」日本文学史の記憶のためである。金思燁は「朝鮮文学史」を、一九五四年に改稿する時、初めて『改稿国文学史』(正音社、一九五四)と命名した。

資料

- 京城帝国大学編『京城帝国大学一覽』
 青丘学会編「青丘学叢」
 高木市之助「朝鮮の自然に就て」『真人』第7巻第7号、一九二九・七
 高木市之助「朝鮮の国語教育について」『京城帝国大学創立十周年

記念論文集 文学篇(京城帝国大学文学会論纂第六輯)、大阪屋号書店、一九三六・二〇

高木市之助「大東亜建設と国語国文学のありかた」日本諸学振興委員会編「日本諸学」第4号、一九四三・一〇

高木市之助『国文学五十年』岩波新書、岩波書店、一九六七

高木市之助述、深萱和男録『尋常小学国語読本』中公新書、中央公論社、一九七六

高木市之助『高木市之助全集』第一巻、講談社、一九七六

高木市之助『高木市之助全集』第九巻、講談社、一九七七

高木市之助『高木市之助全集』第一〇巻、講談社、一九七七

*

芳賀矢一『国文学史十講』富山房、一八九九

芳賀矢一『国学史概論』国語伝習所、一九〇〇

芳賀矢一『国文読本緒論』『国学とは何ぞや』『明治文学全集』44

落合直文・上田萬年・芳賀矢一・藤岡作太郎『筑摩書房、一九六八

藤岡作太郎『国文学全史』平安朝篇』東京開成館、一九〇五、平凡社、一九七一〜一九七四

参考文献

- 池田彌三郎「解説」『高木市之助全集』第九巻、講談社、一九七七
 内野吾郎『文芸学史の方法―国学史の再検討―』桜楓社、一九七四
 折口信夫『古代研究』第一・部民俗学篇一、二、第二部国文学篇、大岡山書店、一九二九〜一九三〇

風巻景次郎「芳賀矢」と藤岡作太郎「文学」第23巻第11号、一九五五・
一一。

鹿野政直「日本近代の民間学」岩波新書、岩波書店、一九八三

西郷信綱「解説」『高木市之助全集』第一巻、講談社、一九七七

ハルオ・シラネ、鈴木登美編「創造された古典―カノン形成・国民

国家・日本文学」新曜社、一九九〇

中山昭彦「へ文学史」とナシヨナリティー―猥褻・日本人・文化防

衛論―「近代知の成立」岩波講座近代日本の文化史、岩波書店、

二〇〇二

ロラン・バルト『表徴の帝国』宗左近訳、ちくま学芸文庫、筑摩書

房、一九九六

藤井貞和『国文学の誕生』三元社、二〇〇〇

ユジンピル 유준필 「형성기 국문학 연구의 전개양상과 특성」『形

成期国文学研究の展開様相と特性』ソウル大学博士論文、一九

九八

*

朴光賢「京城帝国大学」の文芸史的な研究のための試論」『한국어

문학연구』『韓国語文学研究』第21集、一九九九

朴光賢「京城帝大「朝鮮語学・朝鮮文学」講座―高橋亨を中心に」『한

국어문학연구』『韓国語文学研究』第26集、二〇〇三

(バク・グアンヒョン／東国大学校国文学科教授)

〔編集人付記〕 本論文は、朴光賢 박광현 「식민지 조선에 대한 국

문학의 이식과 다카기 이치노스케(高木市之助)」「植民地朝鮮
への「国文学」の移植と高木市之助」(『日本學報』五九輯、
二〇〇四・六)の日本語訳である。植民地朝鮮における高木市之
助に関する韓国側からの貴重な研究成果であり、著者の朴光賢
氏のご許可を賜り、日本語訳を本誌に掲載した。朴光賢氏のご
厚意に記して謝意を表したい。日本語訳は、キムドンヨップさん、
韓珉熙さん、韓現旭さん(青山学院大学生)に作成してもらい、
小松靖彦が朴光賢氏の博士論文「京城帝国大学と「朝鮮学」」(名
古屋大学大学院、二〇〇三)を参照しつつ日本語を整えた。そ
れを最終的に、韓京子氏(青山学院大学教授)に確認してもらっ
た。韓京子氏には、朴光賢氏の博士論文のインターネット公開
情報を御教示賜り、また掲載許可など、朴光賢氏との交渉につ
いても多大なるご支援を賜った。なお、原論文の年号などの誤
りを訂正した。引用文の情報を補った箇所もある。また、読者
の便を考え、「」で小松がことばを補ったところがある。